

西塩子の回り舞台「平成の大幕」まもなく完成！

歴史と伝統を未来へ紡ぐ

今秋、3年ぶりの組立と公演を控え、何かと注目の西塩子の回り舞台。今年注目のひとつが「平成の大幕」のお披露目です。

回り舞台保存会では、平成9年に半世紀を経て復活してから貴重な文化財であり傷みも激しい道具類を守るため、できるだけ材料や道具などを新調してきましたが、舞台の顔ともいえる「大幕」は、文政3年（1820）に作られ180余年もの歳月を経ながら、そのみごとに出来栄えゆえに、なかなか引退することができませんでした。

そこで、地元の人々が綿を栽培し、紡いで織った生地を下小瀬の紺屋が染めたという伝承にちなみ、平成14年から「平成の大幕」作りが始まりました。多くの方々の協力による活動も、5年目の今年、いよいよゴールが見えてきました。

それは綿の種まきから始まった

『西塩子の回り舞台』の大幕を、できるだけ昔ながらの手法で作って「みませんか」との無謀な呼びかけに、資料館でハタオリ活動を行っていた人々が中心となって応じ、「大幕を織る会」が結成されました。平成14年3月のことです。

大幕を織る会では、自分たちで綿を栽培すると共に、綿作りボランティアを募集。大宮小、大場小、塩田小の小学生や関係者をはじめとして空き畑や庭先のプランターを使って子どもからお年寄りまで大勢の方の参加により、1年で大幕に必要な100kg以上の実綿が確保できました。



文政三年（1820）銘の西塩子の幕



▲大宮小学校4年生（当時）の綿の種まき



▲ボランティアによる綿の種切り



▲綿畑の手入れ

紡ぎと織りの猛特訓

大幕の大きさは長さ3・6m、幅約12m。長さ4mほどの反物巾の生地を縦に36枚縫い合わせて作ります。布の強さを一定にするために、大幕を織る会の7人は、古い幕を観察して、糸の太さや経糸・緯糸の密度を決め、綿作りと並行して、糸紡ぎと織りの特訓を繰り返しました。

複数人で織った布を縫い合わせて一枚の幕とすることは、想像するよりはるかに難しいことです。

それは、7人のメンバーが同じように白生地を織ること。紡ぐ糸の太さと織り目を揃えておかなければ、染める際のムラの原因となってしまうためです。

「個性を出さない。個人差を出さない」ことが一番重要なのです。



▲織りの特訓



▲糸紡ぎ

染め職人をさがせ

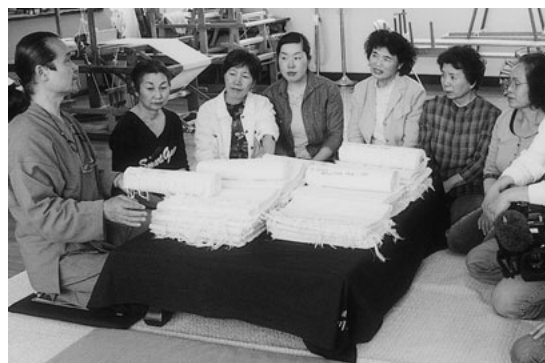
1年の特訓を経て、いよいよ大幕の生地を織り始め、布の準備にめどがついたところ、新たな難問が浮上しました。

それは、大幕を染める職人を探すという問題です。有名な染織研究家に相談したところ、このような大作を染めることができる職人は、現在日本に2、3人しかいないのでは、とのこと。

そこで、平成16年秋、思い切って染織の専門雑誌に職人公募の記事を掲載してもらったところ、沖縄から県内まで、第一線で活躍している7人の染色家が名乗りを上げてくれました。

専門家を交えた面接や2度にわたる審査を経て、昨年の春、木綿の研究家でもある鍋島更紗の復元にも取り組んでいる兵庫県三木市在住の染織家浅井一甲氏が「平成の大幕」を染める

職人に決定したのです。



▲浅井氏に織り上がった生地を託す（左から浅井一甲氏、大幕を織る会 樋田妙子さん、池上和子さん、和知令子さん、金井津子さん、榎本すみ子さん、佐久恭子さん）

※大幕の染色費用は、（助東日本鉄道文化財団の助成金でまかなわれています。

大幕コレクション

～市内に残る大幕～

県北西部に位置するこのあたりには、「西塩子の回り舞台」のような組立式歌舞伎舞台が数多く分布していました。西塩子に隣接する、緒川地域下小瀬と御前山地域門井にも大幕が残されています。これらも、西塩子と同じ時期に下小瀬で染められたものと推定されます。

●下小瀬の大幕

下小瀬の大幕は、当時水戸の大薩摩座で大当たりをとった人形浄瑠璃、近松門左衛門作「国姓爺合戦（こくせんやかっせん）」の一場面を染めたもの。主役の和藤内が虎を踏んまえて伊勢神宮のお札をかざし、明国人を圧倒しています。糊伏せ*して地色を藍で染め上げ、細かい筒描き*を施して顔料等で彩色したようです。コミカルな味わいがありながら迫力に満ち、魅力的な作品です。幕に名を残す長山長次衛門が、地元のために腕を振った傑作です。

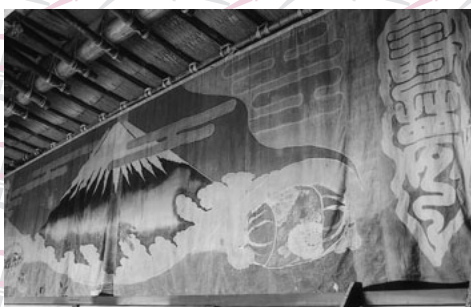


*糊伏せ：生地に糊を塗ることで、染めたくない部分を防染する方法

*筒描き：防染のため糊を絞り袋（筒）に入れ、絞り出しながら線を描く方法

●門井の大幕

「一富士 二鷹 三茄子」の「初夢」をモチーフとして描かれており、菊柄のくくり枕から吹き出して表された夢の中には、富士山と二羽の鷹、そして左下に籠に入った茄子を配置して、目出度く、洒落な意匠としています。やはり筒描きを施し、顔料等を用いて引き染め*にしたと思われます。右に「寿夢」、左にはおそらく「門若」の文字と職人の銘が入っていたのですが、左端は現在失われています。



*引き染め：刷毛や筆に顔料をつけて直接生地に描いたり染めたりする方法

「平成の大幕」の染め職人
浅井一甲氏の講演会を開催！

文政の大幕を染めた長山氏ゆかりの緒川総合センターを会場として、浅井氏をお招きしての講演会を行います。

市内に残る3枚の大幕を展示し、その技術の高さや、映像を交えて平成の大幕制作の工程や苦勞、駆使した染色技法を、関西人特有のノリで楽しくお話しいたします。

会場のエントランスホールには、制作過程の写真パネルとともに、ご好意によって数多くの浅井氏の作品も展示します。

これから西塩子のみならず、当市にとっても宝となる、当代一流の染織家が一世一代と力を込めた「平成の大幕」。お披露目を前に、職人の技と人に会いに来てください。

【講演会】

日時 8月26日(土)13:30～15:30

会場 緒川総合センター 文化ホール

【作品等展示】

会場 緒川総合センター

エントランスホール

日時 8月26日(土)9:00～17:00

8月27日(日)9:00～16:00

